

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	辻 浩和
論文題目	中世<遊女>の身分とその支配		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、日本中世の<遊女>集団に対する支配と差別のあり方及びその変容を解明すること、すなわち<遊女>集団と社会との関係の変化を明らかにするものである。そのために、第一に<遊女>集団の構造に着目し、集団の自立性と、上部権力が集団のどの部分を把握するかを問題にする。第二に<遊女>の芸能に留意し、<遊女>が社会から期待された職能を追究する。以上の視角から、鎌倉期以降を中心に、様々なジャンルの史料を活用して、課題を解明する。</p> <p>本論文は「はじめに」と第一章「問題の所在」、第二章から第四章の上部権力の支配と<遊女>集団の考察、第五章・第六章の鎌倉時代中・後期及び戦国期の変容の分析、第七章「まとめ」から構成される。「はじめに」と第一章「問題の所在」では、先行研究を整理し、その問題点の中に課題を見出す。後藤紀彦・網野善彦に代表される研究史を検討し、<遊女>の支配関係や社会的な位置づけに関して研究が遅れていること、代表的な史料の集中する院政期に議論が偏ることなどを指摘する。この点を踏まえ、<遊女>集団の側に視点を置き、鎌倉期以降の断片的な史料を活用して対象とする時代を拡張、見落とされてきた<遊女>の実態や変化に肉迫することを目指す。なお、<遊女>には遊女・傀儡子・白拍子があり、遊女と傀儡子を「遊女」、遊女・傀儡子・白拍子を<遊女>と表記することにする。</p> <p>第二章「朝廷と<遊女>」では、朝廷による<遊女>支配を説く後藤紀彦・網野善彦説を再検討する。後白河院・後鳥羽院は「諸道」に亘る芸能興隆の一環として<遊女>と交流し、遊芸を摂取した。この芸能興隆は院個人の帝徳を高めるため行われ、<遊女>を組織化する動機は低調であった。また、後鳥羽院政期の「白拍子奉行人」は、芸能によって近臣を取り立てる「知人」政策の一環の可能性が高く、白拍子の組織化ではない。朝廷と<遊女>との関係では貴族の個人的ネットワークに拠るところが大きい。第三章「寺社と<遊女>」では、これまで全く言及されてこなかった寺社による<遊女>支配について、春日若宮拝殿「遊女」を中心に検討する。春日若宮の拝殿組織には「遊女」が存在し、西金堂と衆徒とに二元的に支配されていた。その職掌は今様の奉仕にあり、今様の流行が終わる鎌倉中・後期には拝殿「遊女」が見えなくなる。また、拝殿「遊女」は私宅を有し、私的な営業を行っていた。寺社と「遊女」との繋がり、天王寺や清水寺でもその痕跡を認めることができ、寺社との関係は白拍子にも妥当であると考えられる。</p> <p>第四章「「遊女」集団の内部構成」では、鎌倉末期の兵庫における「遊女」集団のあり様を分析し、その内部構造と支配との関係を考察する。「遊女」集団は<イエ>を基礎と</p>			

する座的構成をとっており、内部に長者・上首・一般「遊女」の階層性があった。この集団は執行部と内部規範とを持つ自立的な集団である。長者は上部権力から補任され、上部権力は長者を通じて集団を掌握していた。「遊女」集団の形成は上部権力の支配に先行しており、権力による支配は集団にとって外在的で、今様・買売春などの生業が集団の基礎である。

第五章「中世前期における〈遊女〉の変容」では、「居住」と「呼称」の変化から、中世前・後期における「遊女」の変容を検証する。「居住」は〈遊女〉集団自体、「呼称」は〈遊女〉集団と全体社会との関係を表現する。13世紀前半までの「遊女」は、今様の正統性を確保するため本拠地に執着し、京都に滞在しても居住することはなかった。しかし、鎌倉中・後期に今様が衰退すると、本拠地への執着はうすれ、「遊女」の京内居住や本拠地の移転が活発化する。また、今様の衰退にともない、「遊女」の芸能性は減退し、売春性が前面化する。13世紀半ばには、芸態の違いによって区別されていた遊女と傀儡子の呼称が曖昧化し、同時に「傾城」「好色」「淫女」など容色・売春にまつわる呼称が定着する。「遊女」とは対称的に、白拍子の居住や呼称は変化しない。これは、芸能としての白拍子がこれ以降も存続するためである。

第六章「中世後期における〈遊女〉の変容」では、中世後期の〈遊女〉の展開を身分の観点から捉え直し、「卑賤視」の内容を検討する。〈遊女〉は〈イエ〉を持ち、内部には家長の〈遊女〉と下人・所従の〈遊女〉の二つの階層があった。戦国期に「遊女」の〈イエ〉で男女の勢力が交代し、「遊女」が家長の地位を喪失する。その結果、下人・所従の形態が「遊女」の主要なあり方となっていく。「遊女」は家長の地位を喪失し、百姓身分など〈イエ〉に関わる身分を失うと考えられる。「遊女」は中世を通じて非人身分を与えられず、「遊女」への「卑賤視」は別の筋道で考える必要がある。15世紀の変容を経て、中世「遊女」は近世〈遊女〉に連続していく。

第七章「まとめ」では、全体の主張を〈遊女〉集団の内部構造、長者と上部権力の支配、「遊女」の私的な営業と今様相承の原理、鎌倉中・後期の「遊女」集団の再編成と売春性の増大、「遊女」と白拍子の展開の違い、戦国期における卑賤視の強化の諸点に整理する。また、〈遊女〉集団の再生産のあり方、家族や下人・所従の職掌や可視的身分表象の具体像、本拠地と地域社会との関係など、今後の課題をあげる。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、日本中世社会の〈遊女〉集団と芸能の関係を考察し、〈遊女〉を通して中世社会を見通すものである。中世〈遊女〉の研究史は20世紀初頭の柳田国男・中山太郎・喜田貞吉に遡る。しかし、本格的な研究は1980年代の後藤紀彦や網野善彦に始まり、近年の服藤早苗・豊永聡美・檜原潤子の業績に至る。一方、1980年代以降の歌謡史研究は「遊女」の芸能である今様の相承の論理を解明し、「遊女」集団と芸能の密接な結び付きが明らかにされた。本論文は以上の成果を継承し、斬新な視角と徹底した史料の収集から中世〈遊女〉の実態を解明したもので、従来の研究を一新したと評価できる。この成果のもたらす意味は大きく、〈遊女〉もその一つである中世「職能民」研究にも多大の影響を与えると考えられる。

本論文の第一の意義は、〈遊女〉研究が院政期と近世との間で断絶することを省み、鎌倉期から戦国期を主な対象とすることで、中世〈遊女〉史と近世〈遊女〉史とを架橋することに成功したことである。すなわち、鎌倉中・後期における売春性の前面化、戦国期における男女の勢力交代、「遊女」の下人・所従化を経て、近世の〈遊女〉への道筋が解明された。

第二の意義は、鎌倉期以降の〈遊女〉の実態の解明から、従来強調された朝廷との関係ではなく、寺社との関わりが判明したことである。中世〈遊女〉研究の通説は朝廷による〈遊女〉支配を強調する後藤・網野説である。申請者は後藤・網野説を後白河院・後鳥羽院の芸能興隆策を明らかにすることで否定する。さらに寺社と〈遊女〉の関係に着目するが、寺社の〈遊女〉支配はこれまで言及されることがなかった。春日若宮拝殿の史料群の綿密な検討のほか、天王寺・気比神宮や清水寺の新出史料まで、断片的な史料を網羅し、結論を提示する。後藤・網野説は完璧に否定されたと言える。

第三の意義は中世「遊女」集団の内部構造を考察し、集団の自立性を前提に上部権力の支配を検討したことである。従来も「遊女」に長者がいることは知られていたが、集団の構造を知る手掛かりはなかった。本論文は『正安三年業顕王西宮参詣記』という好個の史料に辿り着き、「遊女」集団の執行部のあり方を解明することに成功した。すなわち、鎌倉末期の兵庫の「遊女」の執行部は、長者と臈次制で構成されていたのである。この事実を突破口に、「遊女」集団は内部に長者・上首（以上が執行部）・一般「遊女」の階層性があることを指摘する。兵庫の「遊女」は自立的な集団であり、上部権力は長者を通じて集団全体を掌握していたのである。また、「遊女」の居住の原理を解明し、鎌倉中・後期における本拠地の移転や京内居住を指摘する。「遊女」の生態がさらに明確になったと言える。

第四は中世〈遊女〉を芸能史・歌謡史の観点から分析し、その変容過程を論証したことである。従来歴史学では中世〈遊女〉は差別・女性史の視角から論じられ、近年になっ

て売春性と芸能性のバランスが論じられるようになっていく。申請者は芸能史に堪能で、歌謡史研究の今様相承の論理を援用し、「遊女」と今様の関係に着目する。今様の流行と芸態の違いが遊女と傀儡子を区別させ、鎌倉中・後期に今様が衰退し、両者は同一視されるようになる。「遊女」は売春性が前面化し、傾城・好色・淫女とも呼ばれるにいたる。中世「遊女」は芸能の盛衰によって変化したことが明確となった。

第五に、以上の本論文の意義・内容を支えるのは、膨大な史料の収集と解読である。鎌倉期以降の〈遊女〉史料は断片的であるため、鎌倉期以降のより豊かな実態の究明は遅れていた。本論文はこの点を反省し、貴族の日記・記録、歌謡史・芸能史の史料、和歌集、古文書など各種の多様な史料を、摂関期から戦国期まで文字通り博搜した。これは驚異的な作業と言える。その結果、鎌倉期以降の寺社との関わり、「遊女」集団の構造、芸能の流行との対応など、重大な事実が見えてきたのである。この中には春日若宮拝殿の「遊女」の史料群（第三章）や『正安三年業頭王西宮参詣記』（第四章）など、従来ほとんど取り上げられていない史料が含まれる。史料の収集は諸学の基礎であるから、とりたてて取り上げる必要はないかもしれないが、本論文では史料の博搜が持つ意味は特筆されるべきである。

このように本論文は日本中世の〈遊女〉研究に画期的な成果をもたらした。さらに〈遊女〉は中世「職能民」の代表的な一つである以上、日本の中世社会のあり方を解明する有力な素材としうる。天皇の「職能民」支配と南北朝期の転換を主張する網野善彦説には、強烈的な反論となっている。なお、今後の課題を指摘するなら、「遊女」集団と上部権力との関係（長者の性格）、臈次制と家長の関係、〈遊女〉の家族関係など、総じて〈遊女〉の実態は、今後もさらに検討を続ける必要があるように思われる。

以上のことから、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成24年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降